

ネオ・ジオン総帥の幻想入り

黒の煌めきパールバティー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アクシズでの最後の決戦にて、アムロに負けたシャア。  
しかし、彼は死ななかつた。

彼は別の世界、『幻想郷』へ来てしまったのだ。

彼は新たな世界で、何を見、何を思うのか。

これは、『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』の続きのような世界線でのお話となります。

多少原作との違いはありますが、ご了承くださいませ。

この作品は、ガンダムシリーズを知らない人には分かりにくいです。

まずは『逆襲のシャア』をご覧くださいをおすすめします。

ですが、もっと知りたい方は、初代『機動戦士ガンダム』から観ることをおすすめします。

# 目次

シヤア、アムロとの最後の戦い	1
シヤアを捨てたキヤスベル	3

シヤア、アムロとの最後の戦い

「アクシズは地球の引力に引かれて落下している！私の勝ちだアムロ！」

「レガンダムは伊達じゃない！」

アムロはそんな絶望的とも言える状況でも、諦めることはしなかった。

レガンダムで、アクシズを止めようと言うのだ。

「無駄だ。モビルスーツのスラスタ―程度で、アクシズの落下は止められんぞ！」

「そんなこと、やってみなきやわからないだろ！」

何故そうまでして地球人アースキイドを守ろうとするのだ！

奴らは地球に負担をかけすぎた。地球は既に保たるところまできているというに！何故！

だが、幾ら高性能のレガンダムであろうと、小惑星を止める程のパワーは無い。

所詮貴様のやっていることは、自分をも犠牲にした無駄死にだ。

「貴様の所為で……多くの部下達やララアが死んだというのに、貴様はその命を自ら捨てると言うのか!!」

「そんなことはない！僕は、確かに多くの人を殺した。だけど！だからこそ、その命を背負って、新たな命を守る為に戦うんだ！」

……アムロ……お前は、私が見ていない間に随分成長したというのか。

大切なものを、守る為に、強くなったのか。

だが……もう終わりだ……

そう思った時、

「むっ…」

ジエガンやギラ・ドーガが無数にやって来た。

そして、アクシズを押し返す。

だが、機体性能のあまり高くないジエガンやギラ・ドーガでは、衝

撃に耐えられずパワーダウンするのは目に見えている。実際、一機、また一機と、引き剥がされていく。

それなのに何故？

「!!」

突然、淡い光がアクシズを包んだ。

この光は……？

「これは……サイコフレームの共振……。そうか、人の想いが集中しすぎて、オーバーロードしているのか。だが、不思議と恐怖は感じない。むしろ、温かさと安心さえ与えてくれる。しかし、この温かさを持った人間でさえ、地球を破壊するんだ。それをわかるんだよアムロ!!」

「わかってるよ！だから、こうやって人類の希望の光を見せなきゃいけないんだろ！」

私は、またアムロに負けるのか？

ララアの仇も討てず、自分の信念さえ撃ち破られて……。

そして……

『アクシズ、地球圏から離脱！進路変更確實です！』

ラー・カイラムの乗員の通信音声が、私の敗北を告げた。

ああ、アムロ。君の勝ちだよ。

君は、常に自分を曲げずに進んできた。大切なものを、守る為に。

一方私と言えば、ザビ家への復讐の為に戦う決意をしたのに、結局はそれさえ放棄し、父の意思も継ぐことなく生きてきた。

私と君の違いは、最早歴然だ。

私は、ゆつくりと目を閉じた。

次の人類は、どんな進化を遂げて、どんな未来を歩むのかを、思い描きながら。

シヤアを捨てたキャスベル

「……………む？」

消えかけていた感覚が戻ってきた。

まるで、まだ自分が生きているかのような…。

「!! まだ… 私は生きているのか？」

目を開けると、見覚えのない林のような場所にいた。

ここは地球か？

そして、自分が離別したコックピットにいる筈なのに、MSと変わらぬ高さにいる感覚がして、モニターに映すと、

「! サザビーが… そのまま…」

確かに破壊された筈のサザビーが、造られたばかりの姿で立っていた。

更にそれだけでなく、

「ザク、ズゴック、ゲルググ、ジオング、リック・ディアス、百式…  
今まで私の機体全てが揃っている。しかもどれも新品同様ではないか…!!」

しかし、見たことのないMSもあった。いや、正確には見たことあるのだが。

見た目は若干サザビーに似ているが、全体的にサザビーより重厚なボディをしている。

「ナイチンゲール…!!既に完成していたのか…!？」

サザビーと共に製造される予定だったのだが、実際には計画だけに終わったと聞いていたのだが…。

「それに、このMS達は一体…」

「それは貴方が幻想になってしまったからよ」

「!!」

私はカメラを声の方に向けた。

そこには、ジェットパックも背負っていないのにも関わらず、空中に浮かぶ女性の姿。

服装は、紫色のドレスのようだった。

「(一体どのように浮いているのだ?)」

「私は八雲紫。この『幻想郷』を作った者よ」

「幻想郷?」

シヤアは周りを見渡す。

だが目に入るのは地球の木々のみ。

「ここは地球なのか?」

「ええ、そうよ。でも貴方のいた地球ではない」

「…… どういうことだ」

「分かりやすく言うと、貴方は別の世界に来てしまったの」

別の世界?

そんなものが存在するのか?

「元の世界で、恐らく貴方は誰もが知るような偉大な人物だったのでしようね。でも、貴方がいなくなった途端に、その才能、行動、歴史等と、他の誰にもできないことでもあった。だから、貴方という人物が存在していたかさえ、幻想のものとなってしまったのよ」

「そして、私がいけないと言うことは、このMSも、と言うことか」

「そういうこと。で、貴方は一体何者かしら?」

「失礼。自己紹介がまだだった。私はシヤア・アズナブル。だが、本名はキャスベル・レム・ダイクンという。君は胡散臭くはあるが、信用はできそうだ」

ここにあるMSは、偽物には見えなかった。

だとすれば、彼女の言っていることは真実であり、狙われることはない。

その為、本名を明かした。

「そう。じゃあ私はキャスベルと呼ばせてもらおうわ。そっちの方がなにかしつくりきたし」

「できればシヤアの方が良かったのだがな。まあ構わんさ」

そうやって私はサザビーから降りた。

「あら、結構良い顔してるじゃない。モテるでしょう?」

「私が求めた女性は一人だけさ。ともかく、この世界がどういうものかを知りたい。私はもう戻りたいとは思わんからな」

私は…… 『シャア・アズナブル』を捨てることにした。  
赤い彗星やネオ・ジオン総帥でもない。  
ただの人間、『キャスベル・レム・ダイクン』として生きる為に。